
鬼と龍

クレト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼と龍

【Nコード】

N4405Z

【作者名】

クレト

【あらすじ】

オリジナル小説サイト「真紅真愛」にて公開しております。

残虐非道な皇帝の古くからの友人である、女好きと剣術で有名な白龍は彼の元を訪れた。

その理由は“強い花”の噂を聞きつけたからだ。

だが、そこにいたのは誰からも恐れられる“存在してはならぬ者”だった。

龍シリーズ第二弾です。

第1話「存在してはならぬ者」

世は憎悪に包まれていた

巨大な国を支配するのは残虐なる皇帝、蛇黒だくろく

彼が行うは、非道なる政治

民が課せられた重税はもちろん

少しでも不平不満を持ち出せば

一族もろとも、見せしめに火あぶりの刑を執行され
皆殺しにされた

作り上げた強固な武力により

国に生ける者全てが、苦しい生活を強いられていたのである

無論、蛇黒に対する不満をかきあつめ

いくつもの義勇軍が誕生した

だが、何年もの間、蛇黒軍に勝てる軍はなく

次から次へと弾圧されていったのである

そして、唯一残された国民の希望が狼銀軍ろうぎんであり

蛇黒軍と狼銀軍がまた幾年にも渡って

戦を繰り広げていたのである

しかし、未だ狼銀軍は勝機が見出せないでいた

何故ならば、ただ一人の

“存在してはならぬ者”に勝てないでいるからだ

その者は“紅い鬼”と呼ばれ

狼銀軍の屈強な兵達を次から次へと倒していつているからである

第1話「存在してはならぬ者」

「蛇黒皇帝陛下！…この度の勝利、心からお喜び申し上げます！！」

宴の間にずらりと並んだ家臣達からの祝言に、蛇黒はにやりと笑みを浮かべた

「勝利・・・、貴様達はこれを勝利と呼ぶのか？」

蛇黒の問いかけに家臣たちはお互いに顔を見合わせる

「数々の義勇軍を破ってはきたが・・・

最後の義勇軍がこの2年間、未だ殲滅することが出来ていない

ましてや、寄ってきた野良犬を、追い払う程度の戦だ!!」

怒りにまかせ

蛇黒は杯を力いっぱい床に投げつけた

「この程度の戦を、勝利などと思った覚えなど無いわ!!」

響き渡る蛇黒の怒声に

家臣たちは怯え、より一層深く頭を下げる

家臣とはいえ、蛇黒に彼らの顔は見えていない

異様な光景ではあるが

家臣と呼ばれ、大広間に整列している彼らの顔には

蛇黒軍の紋章が描かれた真っ黒な布がつけられてある

まさに、誰が誰なのかはわからない状態なのだが

これは蛇黒が皇帝になった時に義務付けられたものであり

その真意は彼にしかわからないものでもある

新しい酒の杯をかたむけながら

蛇黒はつまらなそうな表情を浮かべた
家臣たちの間に不穏な空気が流れた

だが、そんな中、一人の家臣がすつと前に現れ
左手で拳を握り、額に当て、礼を現した

「恐れながら、申し上げます」

「なんだ？」

「最後の義勇軍を率いる総大将、狼銀は蛇黒様の古くからの知人であるとお聞きいたしました」

「そうだ、あやつとは同門の出だ、それがどうした？」

名も告げず、その家臣はにやりと笑みを浮かべ、こう言った

「だからこそ、あなた様の攻略もご存知なのでは？」

一人の家臣の不躑な物言いに、場内は恐怖のざわめきがおこる
だが、相反して、蛇黒は口の端を吊り上げ、ふっと鼻で笑う

「これが攻略？私は勝ってもおらぬが、負けてもおらぬ

城の堀の中にも、一歩たりとも入れたことなど無い

「これのどこを攻略というのだ？」

「ああ、これは失礼いたしました。確かに攻略ではございません

ただ、あなた様に勝ちもしないが、負けもしない軍略を持っている

なるほど、つまりはあなた様と同様の才を持っている

というわけですか？」

ひょうひょうとした物腰の家臣に

周りの家臣たちは布の下でひそかに青褪めた

だが、蛇黒は笑みを崩すこと無く、会話を続けた

「だが、あやつらが勝つことは無い

ここに入ってくることもすらも、出来やしまい」

「そう・・・まさしくその通り

何故なら、ここには・・・・・・・・・・“鬼”がいる」

跪き、礼をとっていた家臣が無礼にも

すっと立ち上がり、ゆったりと蛇黒のほうへ歩いていく

「“鬼”とは古来より言い伝えられてきた、恐るべき存在

悪の象徴でもあり、現世に“存在してはならない者”とされる

伝説の忌むべき“恐れ”だ……」

家臣の無礼を咎める事も無く

蛇黒は面白そうに、その者の様子を眺める

「それがここに存在し、拳句、悪名高い“蛇黒”を守っている……」

そう呟いた家臣はすりと一本の剣を取り出した
驚いた家臣たちは、広間から慌てて逃げ出す

「だが、それもここまで」

なおも、蛇黒は余裕の笑みを浮かべ、杯をかたむける

「その命、頂戴いたす」

一人の家臣は剣を構え、力強い一步を踏み出した

がきんっ

乾いた音が響いた
振り上げたはずの剣は宙を舞い
背後の柱へ突き刺さる

家臣の目前には甲冑をまとった一人の存在
そして首元にはひんやりと刃の冷たさ

首を刈られるその瞬間

家臣の片手から、もう一本剣がすらりと姿を現す

再び、剣同士の音が響いたかと思うと
すぐに二人の間に距離が生まれた

家臣の顔にかかってあった布が床に落ちる
晒されたのは一人の青年の顔
そして彼の目に映ったのは“鬼”の存在

だが、彼は感じた
“鬼”とは呼ばれるものの“鬼”のようではないと
その姿は鬼とはかけ離れ
恐ろしいほどの真っ直ぐな瞳を持った

一人の“少女”の姿だった

続く

第2話「紅鬼」

蛇黒を守るように少女は青年の前に立ちはだかる
一方、青年はその姿に、ふっと笑みをこぼした

「なるほど、鬼が守るのはこの軍ではなく

蛇黒という存在、ただ一人か」

小柄な体格に似合わない、長身の剣を少女は構える
青年のほうは逆に剣を降ろしたが

少女はそれにかまうことなく、一步を踏み出す

だが、突如、背後から衝撃を受け

少女の体は床に跪いた

「悪ふざけが過ぎるぞ、はくじゅう白龍」

「ははっ、悪い悪い。つつい面白くつてな、蛇黒」

青年　　白龍はにこやかな笑みを浮かべた

少女が受けた衝撃は、蛇黒からのもので
彼女は抵抗することなく、跪いたままで
だが、その手にはしっかりと獲物が握られたままで

白龍が一步近づいた途端、力強く拳を握り締めた

「控えろ、鬼。そやつは私の馴染みだ

手を出すことは一切許さぬ」

蛇黒の一言に、拳の力をゆるめた

その様子に白龍は彼女の目の前に屈みこみ
指先で、彼女のあごを上げさせた

「ずいぶん、うまいこと躡けてあるんだな」

まるで犬を見ているかのような白龍の発言にも

彼女は一切の抵抗を見せず

変わらない真っ直ぐな瞳で彼を見る

「おいおい、そんなの有るかぁ・・・？」

「蛇黒様！！お怪我は！？」

誰もいなくなった広間の入り口から二人の姿が現れた

そのうちの女のほうは慌てて蛇黒の近くに

もう一人の男はゆったりと背伸びをしながら入ってきた

「しつかし……“不敗まけしじやすの白龍”が知り合いとは……

あんたには驚かされますなあ、蛇黒陛下」

ゆつたりとやってきた男のほうを白龍は振り向いた

「蛇黒の精鋭隊の黄猿おうえん將軍か」

「お、知っていただけているとは、光栄な」

「と、いうことは………」

再び、白龍は蛇黒のほうを向き、もう一人の女性に視線を向けた

「精鋭隊の華、蒼犬そうけん將軍ってことか」

何故か万遍の笑みを浮かべる白龍に蒼犬は鋭い視線を向けた

「あー……あいつはやめといたほうがいいですね？人一倍気が強い女だ。」

「それもまた一興」

「“女好き”も有名なままか。」

白龍の軽いノリに黄猿も面白そうに笑った。

「ところで、白龍。ここに何をしにきた？」

まさか貴様までも狼銀についたなどとはほざくなよ？」

「まさか？私はただ・・・」

蛇黒の問いに、白龍は跪いたままの少女に目を向ける

「強い花に興味があるだけだよ」

蛇黒の深いため息にもひるまず、白龍は少女に手を差し出した

「さあさあ、立ってごらん。」

手荒な真似をしてしまったね。許しておくね。

蛇黒は昔から変わったことが好きでな、驚かせたかったのだよ。」

笑顔で話す彼の手を借りず、彼女は無言で自ら立ち上がる。

「ところで、君の名前を覚えてくれるかい？」

ああ、私の名前は白龍だ。好きに呼んでくれてかまわない。」

すると、彼女は蛇黒に向かって左手で拳を作り挨拶をする。

それに対して蛇黒は右手の掌を見せ、挨拶を返した。

返答を貰うと、少女は黙ってその場を立ち去り、さつさと大広間から出て行ったのだ。

「ずいぶん嫌わてしまったものだな。」

「白龍、まさか鬼に会いに来たのか。」

「その通り！噂通りに強い花のようだな！」

蛇黒に向き直り、白龍は万遍の笑みをむける。

その様子に蒼犬は顔を益々しかめさせ、黄猿は声を上げて笑う。

「はっはっは！！大した御人だな！！」

女見たさのためだけにこんな危険な場所に入り込んでくるたあ！

「！」

「昔からそういう男だ。」

蒼犬、宴の準備をしろ。白龍を手厚く持成せ。」

「はっ、かしこまりました!!」

蒼犬も左手で拳をつくり挨拶をし、そのまま立ち去った。

「ところで、蛇黒。彼女の名前はなんという?」

「紅鬼^{ベニイ}、ここではそう呼ばれている。」

「ずいぶんと物騒な名前だな。」

「だから鬼って呼ばれてんでしょう?」

「とても鬼には見えぬ、愛らしいと思ったがな。」

そう聞いて、黄猿はそつと蛇黒に耳打ちする。

「本当にあの不敗の白龍なんですか?」

黄猿の言葉を聞き、口の端を少しあげ、蛇黒は答えた。

「昔からそういう男だと言っただろ。」

どう見ても、ただの女好きにしか見えないが。
どんな監視も見抜けず、ここまで忍び込んできたのだから、
只者ではないと黄猿は思った。

続く

第3話「貴様は興味を持つだろうな」

“不敗の白龍”の名前は有名だった。

どこの軍にも属さず、ただ一人放浪している男だったが、一度、刀を手に持たせれば誰も彼に勝てなかった。

彼に挑み敗れたものは、二度と剣を持てる事は無い。

武人の心すらへし折ってしまう。

時に人々は言う、白龍は「絶対零度の冷酷な剣」を持つと。

それととにかく女好き。

これまた見目麗しい色男のため、女性に困ったことは無い。

幾人もの女人に手を出しては泣かせてきた。

酷い男だとわかっていても、彼に言い寄られては二度と抜け出せない。

拳句、あっさりと捨てられてしまうものだから性質が悪い。

武人に対しても冷酷だが女に対しても冷酷。

そうして、彼の名は世に広がっている。

「ふむ、お酒は飲めるんだね。」

飽きもせず、白龍は紅鬼に声をかける。

だが、一度たりとて彼女から返事が返ってきたことは無い。

宴会の席に紅鬼は出席していた。

彼女は常に蛇黒の一步後ろで控えていた。

白龍は自分の席を用意してもらっているにも拘らず、自分の食べ物と共に紅鬼の横に移動している状態だ。

その様を蒼犬は眉間に皺をよせ、不機嫌そうに眺め、黄猿は今にも笑いを噴出すのをこらえていた。

「蛇黒に剣を向けたことをまだ怒っているのか？」

あれは挨拶代わりの冗談なんだ、わかってもらえないのか？」

なおも無言で箸をすすめる紅鬼は、白龍に見向きもしない。

それでも彼女の顔を覗き込むように、彼が距離を縮めてきた。

すると紅鬼は彼の食事の乗った膳を丸ごと、床を滑らせ移動させた。そこは蛇黒の隣りに設けられた白龍の席であった。

やれやれ埒が明かないかと、ようやく彼は自らの席へ戻る。隣りで静かに酒を傾ける蛇黒に愚痴をこぼす。

「お前はずいぶんと可愛げのない女を使っているんだな。」

「なんだ、もう諦めたのか。」

「いや、今はお前のご機嫌を取ったほうが得策のようだ。

ずいぶんお前になついているようだしな。」

紅鬼は軍の中でも蛇黒に従順な人間だった。

蒼犬も実に充実な人間ではあるが、彼女に負けず劣らず、とにかくぴったりと蛇黒の身を守るのだ。

だが、ついに黄猿が堪え切れずに噴出して腹を抱えて大笑いし出す。

「食事の場ではしたないぞ、黄猿」

より一層不機嫌になった蒼犬が諫めるが、黄猿は「でも」と言いながら笑い転げる。

「おい、蛇黒。お前は俺に何か隠し事しているのか？」

さすがに不審に思い、問い詰める。
だが、彼は変わらず酒を傾ける。

「気になるなら自分で聞けばよい。」

仕方なしに、黄猿に鋭い視線を向けると彼は観念したように苦笑いを浮かべた。

「その鬼子は、口をきかないんじゃないんで、きけないんですよ。」

「どういうことだ？」

「声が出ないんだ、喉を毒でやられちゃってね。」

驚いて紅鬼に視線を向けるが、彼女は黙々と食事をとっている。

「本当に知らないんですか？ “紅鬼一族”のこと」

黄猿の言葉に眉間に皺を寄せる。
すると蛇黒がようやく話を始めた。

「“紅鬼”とは称号のようなものだ。」

先代はあれの母親が紅鬼と名乗っていた。」

「知らないな、どんな一族だ？」

「先祖代々武術や戦術、ありとあらゆる戦に長けた一族だ。」

知性を持ち、武力を持ち、ただ戦で刀を振るうためだけに存在する。」

「毒を盛られたのか？」

「いいんやあ、それは違いますぜ。」

黄猿はぐいっと杯の酒を飲み干すと、嬉しそうに話す。

「自ら飲んだのさ。」

再び、紅鬼に視線を向ける。

彼女はその視線に首を傾げる。

どうやら、こちらの会話など全く聞いていないらしい。

「あの一族は可笑しなことに、弱い人間を必要としない。」

一定の年齢になるとそれぞれが毒を飲み干すことになるんですよ。

「

それで“強い”運があれば生き残り

運が“弱”ければ命を落とす。

まさに運すらも弱者と強者を表す世界だった。

「それで生き残ったのは声を失ったあいつだけってわけです。」

耳は聞こえているそうだが、反応を示さないのは、蛇黒以外の人間に興味を持たないためといわれている。

「益々、貴様は興味を持つだろうな、白龍。」

「もう、そりゃ。」

堪らないほど嬉しそうに紅鬼を見つめる。

今までに会ったことの無い女だ。益々興味が湧いた。そんじょそこらにいる女とはわけが違う。

戦うためだけに生まれ育てられ、一人の人間以外に反応を示さない。

これほど面白い人材はいまだかつて見たことが無い。

白龍の女好きには悪い癖がいくつもある。

いかに女を泣かせても、自分に夢中にさせておけるか。一度に何人の女人を相手にできるか。

噂を聞くだけでも気分が悪くなる癖ばかりだが、

中でも、男に興味が無く、“難攻不落”と呼ばれる女性を

口説き落とすことには殊更、夢中になる。

堅牢な城ほどじわりじわりと攻めて攻略するのが何より楽しいと、彼は思う。

より一層楽しみを得た白龍は再び、紅鬼に近づいた。

「なあ、紅鬼殿。もしよければ明日でも…」

と声をかけた瞬間

ずどん

と、白龍の目前に彼女の愛刀が床に突き立てられた。

何事かと思い、視線をあげると、ちょうど彼女は立ち上がったところだ。

彼と視線があうと、首をかしげ不思議そうな顔をしたがすぐに蛇黒に向き直り、また拳で礼をする。

蛇黒の返答をもらうと、愛刀を引き抜き、颯爽と部屋を後にした。食膳を見ると見事に空っぽである。

「あと、鬼子は礼儀も何もなっちゃいないんで、

相手にするだけでも苦労すると思いますわ！」

腹を抱えて笑いながら、黄猿は白龍に助言した。

流石の白龍も彼女に“人間”として相手をしてもらえるものか不安になった。

続く

第4話「尽くすことが生き甲斐よ」

早朝、白龍は二階から外を眺めていた。

与えられた一室を出た廊下から、それは微かに見える。

見れば見るほど噂とは掛け離れたその姿に、疑問を覚える。

「のぞき見とはずいぶん趣味が悪い。」

声の主は蒼犬だった。

朝も早くから相変わらず無愛想な表情だ。

「たまたま見つけただけだ。」

何をしているのかと気になってな。

しかし…彼女は庭いじりが好きなのか？」

視線の先には、庭園と思われる場所で、

雑草を引き抜く紅鬼の姿があった。

手慣れている様からして、毎朝行っているように見える。

「あの植物が何かご存知か？」

指で示され、見覚えが無かったため、素直に首を横に振った。

「あれの根は猛毒で、体内に入れば二度と助からぬ。」

しれっと話す蒼犬に対し、白龍はぞくりと首筋が冷えた。

「あつちの植物は麻痺の効果があり、大人の体がものの数分で動けなくなる。」

あちらは、死にはしないが体に痛みを残し、治す方法はない。あれに至っては……」

「もういい。そんな酷な話は朝から聞きたくない。」

ついに白龍が根をあげた。

つまりは彼女が育てているものは一般的に毒と呼ばれるもので、恐らく戦に使われるものだ。

「あの一族はやたらと毒に詳しく、その育て方も熟知している。」

まあ、全ては戦うためだな。」

戦い、勝利のためにありとあらゆる手段を使う。
自ら必要とすれば毒すらも育てる。

小柄な少女の見た目から、ずいぶん冷酷な一面が見て取れる。それでも植物が何かわからなければ、食事の準備をする健気な乙女に見えるのに。

「そういえば、蒼犬殿もずいぶん毒植物に詳しいようだが？」

いやらしい笑みを彼女に向けたが、蒼犬はかえって自信の笑みを浮かべて答える。

「蛇黒様の懷で素性の知れぬ毒を勝手に育てさせるわけにはいかないのでな！」

嬉しそうだ。

そうだ、彼女もまた軍の中でも有名な蛇黒“信者”だ。

紅鬼にしても蒼犬にしても蛇黒の何がそんなに魅力的なのか。先にそちらを解明したほうが、たやすい気がしてきた。

「そんなに蛇黒が好きか？」

「あの方にお仕え出来ることが私の誇りであり、尽くすことが生き甲斐よ。」

貴殿には理解出来ぬであろうがな。」

白龍自身、蛇黒を気に入っている。

だからこうして面白ついでに訪問したのだ。

だが、彼の臣下になりたいとも、力を貸したいとも思ったことは無い。

蛇黒の残虐で非道な政治はとうに知っている。

知ってはいても、旧知の仲であることに変わりはないし、手助けしないことも互いに理解しあえている。

だからこそ、対等な立場で会話が交わせられるのだ。

よく知っているからこそ、理解出来ない。

何故、彼に仕えることが出来るのか。

『女心とは、真に理解しがたい。』

ため息をつきながら、再び庭いじりをする紅鬼に視線を移した。

その時、

カーンカーンカーン 鐘が鳴らされ、城内が騒がしくなる。

音が聞こえた瞬間に紅鬼は口笛をならした。

すると一頭の白馬が突然現れ、彼女はしなやかに跨がると走り去った。

「何事だ…？」

「戦の合図だ。狼銀軍が攻めてきたのであろう。」

「ずいぶん呑気だな。」

軍師ともあろう蒼犬将軍が、そんな大事な時にこんな場所で油を売っててもよいのか？」

「私の出番では無いからな。」

「？」

疑問の表情を見せた白龍に蒼犬は余裕の笑みを見せる。

「ついてくるとよい。」

何故、鬼娘が紅鬼と呼ばれるのか、その目で確認させてやる。」

大人しく彼女のあとについて行く。

やがて到着したのは、城下の先の大門の先にある高台。

大門の向こうでは蛇黒軍と狼銀軍が対峙していた。

ここは戦場を一望出来る、蛇黒軍が本拠地として使っている場所だった。

一足先に蛇黒と黄猿は到着していたようで、軽く挨拶をした。

「黄猿將軍もここに居る気か？」

「俺の出番じゃ無いんでね。」

益々、疑問を浮かべる白龍。

蛇黒はまだ静かな戦場を見つめる。

その視線の先にはゆっくりと進んでくる狼銀軍の大群。

こちら側の蛇黒の軍は並んでいるだけであって、なんの動きも無い。

大丈夫なのか？と心配になるが、蛇黒の表情は口許に笑みを浮かべていた。

その時、ドン・ドン・ドンと太鼓の音が鳴りはじめた。

すると真っ黒な蛇黒軍に一筋の道があげられた。

その道を真っ直ぐにかけていく姿が見えた。

真っ白な馬に跨がり、赤みを帯びた大刀を構え、迷うことなくかけていく。

それは見紛うことなき、紅鬼の姿であった。

続く

第5話「何がお前をこんなにも」

その様を何と例えて表現すればいい？

白龍は声をあげることすら出来ずに、ただその光景を見ていた。

白馬に跨がった少女は、ただ一騎で敵軍に向かい、敵陣に突っ込んだ。

すぐにその姿は敵陣に飲み込まれ見えなくなった。

あまりに無茶だと思った。

蛇黒に詰め寄ろうとしたその瞬間。

けたたましい叫び声が幾つも上がる。

何事かと視線を戦場に戻すと、狼銀軍の銀色の軍隊の一部が真っ赤に染め上がる。

ずいぶん離れたこの場所からでもはっきり見てとれるほど、それは見える。

徐々にそれは広がり、真っ赤な道が出来上がる。

そこには全身に返り血を浴び、

折り重なって倒れた敵兵の中心にただ一人、

大刀を構えて立つ紅鬼の姿があった。

白龍は思わず戦場のほうへ近づいた。

本拠地の中でももっと戦場の際へ。

兵達に止められるほど進む。

再び紅鬼は走り出した。

彼女の大刀が敵陣を舞う。

それは力強く振りかざされ、人にきりこまれてゆく。

時に、彼女の手から離れたかと思うと、その手と刀を布で繋ぎ、まるで鎌のようにきりつけられていく。

一度、彼女が動けば数多の赤が宙を舞い、その後には血塗られた生々しい道が残る。

突如、彼女の前に倍はあろう体格の武将が立ちはだかる。狼銀軍の中でも名の通った將軍だ。

彼の姿に、足を止め、一呼吸つく紅鬼。

だが敵将が一步動くと同時に、

彼女も大きな一步を踏み出し、迷わず彼に立ち向かう。

それは一瞬。

突然現れた白馬を踏み台に、紅鬼は宙を飛ぶ。

その体は円を描き、敵将の頭上を飛び越えた。

次に見えたものは、動きを止め、地面に倒れた敵将の体。頭と胴体は見事に切り離されていた。

それでも紅鬼は止まらない。

ただひたすらに大刀を奮い、次から次へと死道を作っていく。

血を浴びることを気にも止めず、

倒れていく人間も捨てて、迷うこと無く戦場をかける。

ただ一人で。

小柄な体は真っ赤に染まり、悲鳴や叫び声を幾多も生み出していく。

「
紅鬼。」

その声に視線を向ければ、笑みを浮かべた蛇黒の顔があった。
先程と変わらず、椅子に腰掛け、戦場を見つめる。

「これが、先祖代々受け継がれてきた、鬼の名の由来よ。」

流石に蛇黒以外の人間は、無表情だった。

その感情を知り得ることは出来ないが、ただ蛇黒だけはこの状況を
楽しんでいる。

それだけは確かだと白龍は確信した。

そんな男だっただろうか？

かつての友を思い出す。

決して善とは言い難い性格ではあったが、戦場を楽しむ男では無か
った。

武力も知略もあり、人望もあった。

器用な男では無かったが、

真っ直ぐで豪胆で力強い姿は、人を引き付けるものがあった。

だからこそ、次代の皇帝に相応しいと称された。

だが、彼は今や誰もが恐れる残虐非道な悪帝。

『何がお前をこんなにも変えたんだ？』

しばらく見ない間に、ずいぶんと変わってしまった旧友を想った。
あの頃の面影を微塵も感じられないことに心を痛める。

やがて、太鼓の音が鳴り響く。

狼銀軍の撤退の合図だ。

それに合わせ、蛇黒軍の撤退の合図も鳴り、紅鬼も自軍へ戻る。
手土産を携えて。

本拠地の入口にそれは並べられた。
合計で10体が横一列に。

紅鬼が勝ち取った、勝利の証。

名が通った敵将の生首だ。

臣下によって、片っ端から名前を読み上げられる。

紅鬼は血を浴びたまま、蛇黒の言葉を待つ。

読み上げ終え、名前の書かれた書物が蛇黒に手渡された。

「あれは何をしているんだ？」

「数を数えているのさ。」

白龍の問いに、黄猿は静かに答える。

しかめ面を見せる彼に黄猿はそつと耳打ちした。

「名の通った敵将の首を千取ってくれば、一族もろとも解放してやる。」

それが陛下が鬼子に出した約束事さ。」

その約束のために彼女は刀をふるうのだ。と教えてくれた。

「まあ、昔は母親が生きていたからあれだったが、

今はあの娘ただ一人だけ。

それでも、あの鬼子はその約束を果たそうとしてんのさ。」

ちょうど黄猿が話終えた頃、蛇黒が言い放つ。

「最後の一つの名が無いぞ?」

「はい、どうやら最近將軍に格上げされた者のようですね……。」

銀色の鎧に狼銀の紋章が入っているのは、將軍の証。

紅鬼はそれを目印に、その首を狙う。

「名がわからんのであれば、数には入れぬ。今日は九つだ。」

周りの臣下達は少しざわついたが、
当の本人の紅鬼は気にも留めず、
いつものように拳で礼をとる。

挨拶をもらい、彼女は白馬に跨がり颯爽と去って行った。

「どこへ？」

「近くの泉に行っただですよ。いつも戦のあとはそこに行く。」

気になるなら行ってくればいいと、黄猿は笑って言った。

蛇黒に視線をやると、ふっと嫌な笑顔を見せて城に帰って行く。

白龍は馬を借り、教えられた泉へ向かった。

続く

第6話「大事に扱ってやらなくてどうする」

本拠地からそう遠くない場所に森はあった。

ずいぶんと奥まったところでようやく泉が見えてきた。

ぱしゃりと水の動く音がする。

その音をたよりに近づくと、

見覚えのある白馬が水を飲んでいた。

見事な白馬だが、その体もまた赤に染まっていた。

紅鬼の姿を探す。

だが、見当たらない。

水面が激しく揺れる。

するりと白い物体が泉から上がってくる。

「
紅鬼ど、」

呼びかけようとして、止まる。

確かに彼女だ。間違いなく紅鬼だ。

だが、何も着ていない。

裸の彼女を目にし、固まる白龍。

一方の紅鬼は彼の姿を確認したが、全く動じない。
何だ？という視線ばかり送っている。

ようやく白龍が我にかえり、慌てて目を背け彼女の姿を掌で隠し、大声を出す。

「早く体を隠せ！！！！！！」

そう言われ、自分の姿を確認したが、納得できないのか首をかしげる紅鬼。

だが、白龍は目を背けたままで埒があかないと、渋々近くの木に吊るしてあった自分の衣服を身に纏った。

ようやく着てくれたと、安心して姿を確認するが、それはほとんど下着のような状態で、きちんとした上着も甲冑も身に着けていない。

見は出来るが、なんとという様かと呆れが出てきた。そういえば、黄猿が「礼儀も何もなっちゃんない」と言っていたのを思い出した。

その言葉の意味を理解した。

紅鬼は常識を携えていない。

無関心、無頓着、不精でがさつ。

まるで野生の獣と何らかわらない性格の持ち主だ。

血を全身に浴びても気にも留めないのは、泥が体についても気にしないのと同じ。

全てを悟って、白龍はため息をつく。

“花”とはよく言ったものだ。

彼女は“獣”だったということだ。

彼の中の性欲は極端に減少した。

こういう人間は白龍の美学に反するのだ。

つまり、“苦手”な部類である。

落ちていた紅鬼は、布を水に濡らし、白馬の体を拭き始めた。

血が固まってしまったのか中々落ちないらしく、

力任せに馬の体をごしごしとこする。

それを見た白龍は慌てて止めに入る。

「こら！そんな風にしては体を痛める！！」

紅鬼から布を取り上げる。

そして、撫でるように丁寧な血のりを拭っていく。

「こうして、少しずつ丁寧にふき取ってやらねば、傷になるであろう！？」

手本を見せ、彼女に教えるが、不満そうに眉間に皺を寄せる顔が見えた。

白馬が見事な馬であることはわかるのだが、
どうも毛並みが荒れていて、まるで手入れのされていない様だった。

がさつな彼女が面倒を見ているのだと知れば、理解できた。

「馬の毛並みは彼らの健康状態の印だということを知らないのか？」

紅鬼は視線を横にずらし、ううんと考え込む。
その様子にがくりと肩を落とす。

「馬の健康は毛並みで確認できる、荒れていればどこが悪い。

だからこそ、普段から美しい毛並みにしておく必要がある。

それと、傷がついてそのままにしておけば皮膚病にもなる。

人間の病気とは違うのだから、治すのも一苦労なんだ。

言葉を持たない彼らだからこそ、

乗り手の貴殿が一番理解し、大事に扱ってやらなくてどうする！
？」

白龍に叱られ、心なしかしゅんと落ち込んだ表情になった気がした。
少しだけ気が引けたが、それにいち早く反応したのは馬のほうだった。

馬は、彼女の顔に鼻先を摺り寄せる。

何度も何度も、まるで彼女を心配しているように。

紅鬼も、馬を可愛がるように鼻先を撫でて、ぎゅうと抱きしめる。

ずいぶんと懐いている。

不思議な気分だった。

戦場ではあれほどの残酷な姿を見せていたのに、

今、目の前では馬と楽しそうに戯れる一人の少女しか見えない。

あどけない笑顔に心底驚いた。

すると彼女は突然白龍に向き直り、左の手の平をぱつと広げて見せる。

その行動に戸惑っていると、何度も彼女は手を広げる動きを見せた。

何となく、白龍は自分の右手を彼女に向けて広げてみた。

すると紅鬼は人差し指で、彼の手の平をなぞる。

文字を書き始めた。

「どうすればいい？」

そうはつきり書いた。

何をだと疑問に思ったが、馬をしきりに触るので、ようやく察した。

「とにかく、優しく撫でるように血のりを拭いてやれ。」

布を返して、そう言った。

すると彼女はゆっくりときこちなく馬の体を拭く。

その様子にふと笑みがこぼれたが、必死な表情が見えた。
白龍は自らの手で、「こういう風に」と動きをつけて教える。

「体の流れに沿ってやると、馬も気持ちが良いのだ。」

白龍の動きを真似して、紅鬼が動く。

しばらくすると、馬がまた彼女に鼻先を摺り寄せた。
どうやら気持ちが良いらしい。

紅鬼も嬉しそうに鼻先を撫でてやる。

その光景に、白龍はもう一つ理解した。

紅鬼は礼儀や常識を“知らない”

教えられていないのだ。

少しだけ苦手意識が消える。

だが、やることやり終え満足した彼女が、

白龍の存在をほっぽって颯爽と城に帰る姿を見て

また、彼の自信が削られたのである。

続く

第7話「お詫びにご協力いたしましょう」

鍛練場が賑やかだ。

剣と剣がぶつかり合い、音を奏でる。

一人の男が、舞っているかのように、軽やかに動く。

彼に対し、数名の兵士たちが同時に切り掛かっていくが、
いとも簡単に受け流される。

彼は音を楽しんでいた。

時に単調に、時に激しく。

一曲に合わせて、体を動かすように。

かかっていく兵士達は見た目、とても軽く向かっているように見える。

だが、不思議なことに、すぐに息があがっていた。

彼らは数人がかりで攻撃をしかけていたのだが、
いつの間にやら、男の剣を止め、避けることに必死になっていた。
切り掛かっていく側であるはずの人間が、
気がつけば剣を受け止める側に变化していたのだ。

そして、ふと彼らの手から重みが消えた。
持っていたはずの剣が無い。

視線をずらすと、近くの地面にそれは突き刺さっており、
ふと首筋にひんやりとしたものを感じた。

男の嫌な笑みに兵士達は青ざめた。
その様子に黄猿は拍手を送る。

「いやあ、流石、不敗の白龍と呼ばれるだけありますなあ。」

褒められた白龍は愛剣を鞘におさめた。

が、その表情は彼の姿を目に入れた瞬間に歪む。

「ずいふんと不服そうなお顔で。」

黄猿に似合わぬ丁寧な喋り方に、白龍は益々顔をしかめる。

憂さ晴らしにと、鍛練場に来た事がどうもばれているらしく、

黄猿はにやにやと憎らしい笑顔を見せる。

観念して白龍は素直に愚痴をこぼす。

「不服な顔にもなる。」

「だから言っただでしょう？」

礼儀も何もなっちゃんないから苦労するって!」

その後、一人で城に戻ってきた紅鬼の姿に、黄猿は大方の察しがついた。

彼女に白龍の所在を聞けば、首を傾げたのだ。

紅鬼ほど、人の存在に疎い人間は見たことが無い。

自分の存在を認識してもらうにも骨が折れる。

哀れと思えど、笑いは堪えなかった。

「あそこまで酷いと誰が予想出来る!？」

「あなたは綺麗な花ばかり見すぎてんだよ。」

「花という問題では無い!何故誰も躑をしてないんだ!」

「あー、そりゃ皇帝陛下に聞いてくれ。」

丁寧な言葉遣いにも疲れ、黄猿は地で話す。

白龍の案内係に任命されたことを恨めしく思った。
じと目で彼に睨まれる。

怒りの矛先は全て黄猿に向けられるのだ。

「わかった、わかった。お詫びにご協力いたしましょう。」

大きなため息をついた黄猿は、懷から小刀を取り出し、
失礼、と呟くと白龍の左手の甲を切り付け、一本の傷をつけた。

「……………おい。」

「まあまあ、ここは黙ってついてきな。」

酷く痛んだわけでは無いが、
何故突然切り付けられねばならないのか。
益々不満が募るが、黄猿は楽しそうに廊下を歩いて行く。

彼の後についていくと、ある扉の前で立ち止まる。

「鬼子！入るぞ！」

遠慮無く扉をあけ、中に入る。

そこは、部屋中に独特な匂いが立ち込めていた。
部屋の至る所に何かの材料であるうか、
枯れた植物や、謎の粉が積み上げられていたり、
壁には多種類の刃物が所狭しとかけられている。

「あれ？居ねえ…庭園だったかな……。」

「ここは倉庫か？」

「いや、鬼子の部屋だ。」

「は！？」

しれっと答えられ、白龍は驚愕する。

よくよく見てみると、わずかな隅に寝床と思われる布を見つけた。

だが、そのほかにはよく分けのわからない物体が溢れている。足の踏み場も、掻き分けなければ出てこないほどだ。

人の住む部屋とはとてもじゃないが思えない。

「不快さが増す部屋だ。」

「あんだ、けっごういいとこの出だろ。」

ついでに綺麗好きでもある。

女好きで有名な彼だが、その他に関する礼儀礼節はかなり重んじている。

あと、自室に無駄なものは絶対に置かない主義だ。

だから、

城の廊下を走るといふことも、絶対にしない。

そんな彼の耳にこちらへ走って近づいてくる、足音が聞こえてしまった。

誰かなんて、もうすでにわかりきっている。

堪忍袋の緒が切れかけたのか、白龍はすぐに廊下へ向かい、大声で足音の主に怒鳴る。

「走るんじゃない！！紅鬼！！！！！！！！！！」

突如現れた彼の出現に、紅鬼は心底驚いて固まる。

彼女の腕には何やらたくさん植物が抱えられており、

それをしっかりと抱きしめる形でそこに居た。

「緊急以外で城内を走るな！！はしたない！！！」

ゆっくりと彼女は頷く。

その様子に黄猿は「まるで保護者だな」と心の中で呟いた。

彼女が部屋をのぞき、黄猿の姿を見て何事か？という表情を見せた。

「いや、白龍殿が怪我をしてしまったな。」

白龍の手首を掴み、傷口を見せる。

もつすでに血が固まり、塞がっていた。

「ちょっと錆びた刃物で切ったんだ、

まあ、大したことは無いが、なにせ陛下のご友人だ。

万が一のことがあつては困る。見てくれ。」

紅鬼は抱えていた荷物を近場に放り投げ、白龍の手をとる。そして、ほとんど固まった傷口を、舌でゆっくりと舐めた。突然の事に、今度は白龍のほうが固まる。

驚きのあまり、黄猿に視線を送る。

「ああ、毒素が無いかわで確認してんだよ。」

「は？」

「鬼子は味覚や嗅覚で毒を感知できる。」

そして、解毒の方法も知っている。」

ふと、部屋中を見て確認する。

ここにあるものは毒植物もあるようだが、
どうやら漢方や薬になる素材が並んでいるらしい。

紅鬼はなにやら粘着質を取り出し、彼の傷に塗る。

「兵士達は怖がって立ち寄りねえが、

そいつは国一薬剤に長けた鬼子よ。」

庭園で育てているのはどうやら毒植物だけではなく、
薬草やらも育てているらしい。

「鬼子、また新しい植物育てたのか？」

ちゃんと蒼犬には報告したんだろうな？あいつ煩いからな。」

彼女は力強く頷いた。

蒼犬はわざと毒の話しかなかったのか。

どいつもこいつも性格が悪い。

そんなことを心の中で思っていた白龍だが、

包帯が無いので、褒美に貰った衣服を裂き始めた紅鬼に、
再び怒りが湧き、数刻の説教をすることになった。

続く

第8話「お会いしたかったものだ」

紅鬼が食堂に入ると、異様な空気が広がる。それは重いような、少し殺気が含んだようなとにかく、気分が悪くなる、そんな空気だ。

軍に所属はしていても誰も彼女に近づかない。彼女のことを慕う者も、守る者も居ない。通り過ぎる時に挨拶すらも無い。

それだけ恐れられている。

白龍はその事実を実際に肌で感じ、少しだけ、不憫さや哀れみを抱いた。

普通的女子として生活していたならば、と。

だが、そんな白龍の心も打ち砕かれる。

「……………黄猿、一体あれは、」

「何人分かなんて数えないほうがいいですぜ？」

二人の向かい側には大量の食事を、次から次へと口に運ぶ紅鬼の姿がある。

無くなれば、食事係の所へ行って皿を差し出しておかわりをねだる。延々とその繰り返しだ。

『だから殺気を感じたわけだ…。』

食事係は紅鬼の容赦無い攻めに堪えねばならない。

彼らにとって城一番の天敵が彼女だと、黄猿は教えた。

白龍自身も彼女の食べっぷりに食欲が減退する。

彼女は放っておくと、ろくに食事を取らないらしい。

それを見兼ねて、黄猿が様子見ついでに、こうして食事を取らせる
そうだ。

ただ、今日は戦の後の食事だったため、これほど大量に食べるとの
こと。

「ずいぶん、面倒見がいいな。」

「俺は鬼子の監視も言い付けられてんでね。」

箸が止まる白龍に

「まあ、一応、要注意人物なわけで。」

と、付け加えた。

もし、彼女が敵軍に寝返ろうものならば、それは恐ろしい話。
逃げ出す隙すら与えられない、とうわけか。

「そのわりには一人で泉に行かせたりするんだな。」

「あんたもわかるだろ？監視するだけ無駄だつて。」

紅鬼が逃げ出したり、寝返ったりはしない。

彼女の頭には蛇黒を守ることしか無い。

わずかな間ではあるが、白龍もそれは確信している。

「何故、そこまで…。」

「それは俺にもわからん。

ただ、言えるのはあいつの母親の代の時からそうだったってこと。

」

「先代の紅鬼が？」

「まあ、この鬼子ほど、野生ではなかったけどな。

ちゃんと教養も礼儀もしっかりとした女人で、

………物凄く美人だった。」

思わず、黄猿と目を合わせる。

彼は本気の眼差しで、深く頷く。

「…………それは、お会いしたかったものだ。」

ふと紅鬼に目をやる。

口の端についた飯を手の甲で拭う姿を見てしまい、ため息が出た。

彼女の日常は、黄猿に聞かせてもらった話そのままだ。

自分の部屋と庭園の往復。

雑草を抜いたり、新しい植物の繁殖に挑戦したり。

自分の衣服は自分で洗って、庭園に干す。

あと、部屋にあった刃物も時々日干しにして手入れをする。

いつも片時も話さず持ち歩いている赤みを帯びた愛刀は、

毎日のように切れ味を確認して手入れをしていた。

部屋の中では薬を煎じたり、効能を調べたり、

それを書物に次から次へと書き留めていく。

その書物は軍に役立ちそうな気がしたが、

書かれていることが難しいことばかりで、

解読するのが困難であるために、

誰も彼女の書物を扱うことが出来ずにいた。

いわば、一族に伝わる秘伝の書物だと称されている。

白龍もちらりと見たが、確かに解読するには骨が折れそうだ。

もはや、彼女を口説くと言う当初の目的はどこへやら。

今はどうすれば彼女を理解できるのかという問題へと変わっている。

大人の二人が、観察するようにじっと見ているにも関わらず、少女は庭園で黙々と自分の日常をこなす。

すると、彼女は突然立ち上がり、桶に水を汲んだかと思うと、口笛を鳴らした。やがて仲良しである白馬がやってきた。どうやら放し飼いしているらしい。

黄猿の話では、あの馬は気性が荒いらしく、紅鬼以外は絶対に乗せないとのこと。お互いに気に入っているのだろうか。

しばらく見ていると、彼女は白馬の体を洗い始めた。白龍が教えた通りの動きそのままに、優しく撫でる。そこは覚えたかと少し安堵した彼の隣で、黄猿はあいた口が閉まらない。

「こりゃ…一体……………」

「どうした？」

「いや、あの鬼子が馬を洗うなんて…珍しいってか、

初めて見たってか……。まさか、あんたか？」

「よほど、あの馬が大事らしいな……………紅鬼！」

黄猿の問いに答えること無く、白龍は紅鬼に近づいた。

「暑い日はかまわんが、今日みたいな涼しい時は日向で洗うんだ。」

誰かを認識するためか、彼を一目見て固まったが、馬の話によやく気がついた。

そして、素直に日の当たりのよい場所まで移動する。

そして白龍に使っている布が衣服だと気づかれ、一喝された。

そんな光景を黄猿は不思議な想いで見つめた。

その晩のこと、晩食を蛇黒や黄猿、蒼犬そして紅鬼と共にとっていた。軽い食事と、酒を嗜む。

「興味はずいぶん削がれたようだな。」

離れた場所で食事をとる紅鬼を眺めている白龍に、隣で酒を飲む蛇黒はそう言った。

「別の興味がわいた。何故、お前に執着する？」

知らぬ、と蛇黒は呟く。

「知能は高い、何故、教養や礼儀を教えない？」

「そんなものに興味は無い。鬼は刃を振っておけばよいのだからな。」

こんな男を好く気持ち益々わからない。
だが、白龍はある決意をする。

「ならば、しばらく紅鬼を借りよう。」

だが、彼女は馬以外の事で白龍を相手にしない。
どうするつもりかと思えば、

「蛇黒、お前が紅鬼に命じろ。」

「貴様の相手をしろと？」

「なんだ、嫌なのか？」

紅鬼は蛇黒の命令には必ず従う。

それを利用するほか、方法が無い。

蛇黒はちらりと紅鬼を見、ふっと笑みを浮かべた。

「鬼、しばらく白龍の相手をしろ。」

蛇黒の言葉に、今まで無反応だった彼女は箸を置き、拳で返事をした。

ようやく白龍は楽しみを抱いた。

黄猿はこの後で紅鬼が「白龍とは誰だ？」と聞いてきたことは黙っておくことにした。

続く

第9話「よく考えるこつた」

「おはよう、紅鬼。」

水やりをしていた紅鬼は白龍の言葉に顔をあげ、立ち上がる。すると、自らの両手をちらちら見て、んゝと悩んだ後、差し出された彼の左手を、右手で軽く叩く。

言葉を持たない彼女の“挨拶”だ。

白龍はまず彼女に挨拶をさせることを教えた。

そして、朝昼晩と共に食事を取る。

決められた分を、規則正しく食べる。

周りの兵士達は驚いていたが、食事係は白龍に対し感涙した。

嫌がるかと思った。

だが、紅鬼はただどしくはあるけれど、すんなりと受け入れた。白龍と談笑する、そんなことはありえないが、

日がな一日彼についてまわり、彼のすることを真似た。

悪い事をすれば叱られ、良い事をすれば褒められる。

はたから見れば、親と子のような関係に見えるが、

彼女に叱られることも褒められる事も、たいした事では無い。

だが、白龍が叱った事柄を繰り返すような事はあまりしなかった。

黄猿は言った。

「“鬼”を“人”に還す気か？」

白龍は望むところよ、と答えた。

蛇黒の悔しがる顔が見たかった。

だが、蛇黒はただ余裕の笑みを浮かべただけだった。

再び戦が起こった。

そして目前では、並べられた首の名前が読み上げられる。
変わらず、全身を赤に染めた紅鬼は、蛇黒の言葉を待つ。

紅鬼は馬鹿で無い。

むしろ知性も知力も他人より頭一つ分ほど出ているくらいだ。

首を並べたとて、決して嬉しそうには見えないし。

戦を好いている様子など微塵にも感じられない。

一度たりとて蛇黒に褒められたことも無いのに、

ただ、彼に声をかけられた時だけ目を輝かすのだ。

いつものように蛇黒から合図をもらい、紅鬼は白馬を呼んだ。

白龍が今回は大人しく城へ戻るかと、ため息をつき、唾を返した時だ。

突如、目前に真っ赤に汚れたままの紅鬼が現れた。

彼女は物を食べる動作を見せた。

ああ、と理解する。

「先に体を洗ってこい。馬も綺麗にしてやれ。」

戻ってきたら私に声をかけよ。夕餉はそれまで待つておく。」

彼女は勢いよく頷き、さつと白馬に跨がり去って行った。

彼女の行動に周りの人間は驚いていたが、

蛇黒だけは笑みを浮かべ、その場を後にした。

「酷な事をする男だな。」

蛇黒様も何故こんな奴を自由にさせるのか理解できん。」

不満をぶつけてきたのは蒼犬だった。

「何が酷なんだ？」

「鬼を人に変えて、戦で使えなくなったらどうする気だ？」

彼女の鋭い視線を受け流す。

「俺もそう思ってたよ。」

彼のため息に蒼犬は疑問を浮かべた。

人の心を持たないから、戦で鬼になれるものだと思っていた。
だから、人としての礼儀や礼節、一定の生活を教えた。

彼女も素直に受け入れたし、存在を認識してもらえた。

だが、彼女は再び戦で“鬼”となった。

おまけに前回よりも手土産は増えたのだ。

白龍は昔から頭脳を使うことが好きな男だった。

剣術も恐れられるほどの使い手に変わりは無かったが、難しい問題や論法、考古学等を好んで学んだ。

それ故に、人の気持ちなどを簡単に見通し、時に操作することもしてきた。

そのの恰好の的が女性であり、攻略することを楽しんでたのだ。

そんな彼が、紅鬼という難題を解読出来ずにいるのだ。

「いやあ、俺様も心配したが、要らぬ気掛かりだったようだなあ、あつはっは！」

黄猿が笑いながらやってきた。

下品な笑い方だと蒼犬は顔をしかめた。

「だから皇帝陛下も余裕の笑みってわけだ。

軍配はあのお人の一人勝ちですか？」

「ふん、昔から競い事であやつに勝った試しが無い。」

どんな些細な競い事も、一度たりとて勝てなかった。
どれほど追い込んだとて、気がつけば形勢逆転。
何度、あの笑みを憎らしく思ったことか。

「俺らより、皇帝陛下のほうで鬼子を理解してるってことかね？」

嫌な響きだ。勝ち負けでは無いが、どうしても蛇黒のほうが優位だ。
その事実は何年経とうがずっとついてくるのか。

「ま、あの人と鬼子の付き合いは、ぽつと出のあんたより、ずつと長い。」

「……………よく考えるこつた。」

ずいぶんと、意地の悪い顔を黄猿が見せた。
何を考えろと言うのか。

その晩、蛇黒だけは自室で食事を取った。
蒼犬は嫌がったが、無理矢理黄猿に食堂へ連れて来られた。
そして、大人しく食事を取る紅鬼の姿に目を丸くした。

「紅鬼、箸の持ち方が違う。」

癖というものは中々抜けない。

廊下を走る事も未だ抜けずに叱られる。

そして、いつも匙を使っていたせいか、

紅鬼は箸の持ち方が壊滅的に下手くそだった。

それでも白龍は根気よく、彼女に丁寧に教える。

益々、蒼犬の顔がまるで奇妙な物を見ているかのような表情に変わる。

驚きのあまり食欲が減るほどだ。

そして、食べ終わったはずの紅鬼の顔が優れない。

戦の後だ、いつも以上の食欲が生まれたはず。

だが、彼女はおかわりをねだらず、白龍が食べ終わるのを待っている。

どう見ても腹が満ち足りて無く、酷く我慢しているように見える。

その様子に、白龍は笑いを堪え、食事係の女性の所へ近づいた。

「まだ、食べ物に残っているか？」

すつと、さりげなく台に置かれた彼女の手に、自らの手を重ねる。

そしてわざとらしく「あ」と手を慌てて離し、照れたような笑顔を見せる。

女性は顔を赤くして、

「少しなら……。」

と答えた。

「そうか、それまで貰ってしまつては君達の分が少なくなつてしまふね。」

そんなことはしてはいけないな。有難う。」

そう言つて彼が立ち去ろうとした時、彼女は慌てて声をかける。

「大丈夫です！まだ材料あるので自分達の分を作れますから！」

あまりの効果に苦笑いを隠せない白龍だが、
申し訳なさそうな笑みを浮かべ、

「彼女の分なんだが…」

と、紅鬼を指差す。

女性は他の食事係の女達としばらく顔を見合わせたが

「しばらく大人しかったですし…。」

と、呟いた。

紅鬼の暴食が止まり、感動の涙を流すほどだ。
よほど嬉しかったのだろう。

白龍は彼女の耳元に口を近づけ

「有難う」

と囁いた。

その後、食事係がやたらと活気づいたことは言うまでもなく、
紅鬼は満足な食事でありつけ、たいそう機嫌になった。

ついでに、黄猿と蒼犬にはより一層「嫌な男」と刻み込まれた。

続く

第10話「せめて名前くらいはつけてやれ」

「これは？」

「腹痛」

「こっちは？」

「風邪によく効く」

「じゃあ、それは？」

紅鬼が手に持つてる葉っぱを指差す。

しばらく悩んだ後、彼女は突如白龍の口にそれを突っ込んだ。

驚きのあまり固まってしまふ彼に対して紅鬼は同じ葉っぱを自ら食べ、

彼の手の平に葉っぱの正体を綴る。

「おやつ」

恐る恐る嚙んでみると、少し甘味を感じた。

どうやら、甘いものが好みらしい。

現在、白龍は紅鬼の部屋の片付けをしている。

片付けついでに、薬草や毒植物を教えてもらっている。

彼は元来勤勉な男なのだ。

ちなみに、彼女の書く書物が何故解読出来ないのかようやくわかった。

彼女自身、植物の名前を知らない。

わからないので、植物に名前を勝手につけて呼んでいる。

ただし、植物に対し人の名前をつけている。

中には「黄猿」「蒼犬」の名前もあった。

ちなみに「黄猿」は「笑い草」で、「蒼犬」は「解熱の薬草」だった。

「そういえば、あの白馬の名前は何て言うんだ？」

彼の言葉に彼女は首をかしげた。

嫌な予感がした。

「名前を呼ばないのか？」

そう言われ、紅鬼は短く口笛を吹いた。

名前を呼ぶ必要が無いのだ。

「せめて名前ぐらいはつけてやれ」

「何故？」

「生ける者、命ある者、名がそれを表す」

白龍の言葉に益々首をかしげる。
深いため息をついて彼は話す。

「昔の人間が言った言葉だ。

“名前があるからこそ生きた証が残る” って意味。

せつかくお前を大切にしているのに、

あの白馬も誰にも褒められたりしないのだなあ。」

わざとらしく残念そうに言う。

その言葉に紅鬼はむむむと悩ませて、考え込んだ。
そしてしばらくして彼の手の平にこう書いた。

「白桃^{はくとう}」

こうして白馬の名前が決まった。

「……………お前、甘いもの好きだろ。」

彼の言葉に首を傾げる彼女は、またおやつを食べていた。

「だから、何なんだ。」

ここは蒼犬の執務室。

そして、部屋の主の彼女は今まで見たことが無いほどしかめ面をしている。

「研石が欲しい!!」

その彼女に対し、これまた険しい顔で文字を書く紅鬼。

「そんなもの倉庫番に言えばよかるう？」

「無いって!」

「切らしている報告は聞いていない。」

「私のが無いの!」

「だから、倉庫番に……。」

「わかった、わかった、私が説明する。」

延々と埒の明かない話を繰り返すので、
ようやく白龍が間に入り、話を進ませる。

「紅鬼の使っている研石つてのは、特殊な石らしく、

いつも、特別に仕入れているらしいんだけど、

今回担当が変わっちゃって、仕入れてなかったようなんだ。」

彼の話に、一応は話を通ったものの、蒼犬の顔には皺が残っている。

「ならば、仕入れるように指示しておく。」

「今すぐ欲しい!!」

「我儘を言うな、仕入れは月に一度と決まっておる。次の日まで待つのだ。」

「・・・倉庫番に仕入れは昨日で、丸一月待たねばならんというわけを聞いたんだよ。」

だから、どうしろというのだ。

あからさまにそんな表情をする蒼犬に、白龍は同情を抱いた。

蒼犬といえど、どうすることも出来ないのだが、

紅鬼には彼女しか言うあてが居ないのだ。

彼女が一番の責任者。という認識だから。

そんなどうしようもない状態に、助け舟を出したのは突如現れたあの男だった。

「城下の市場にならあるんじゃないか？」

「黄え、ん……………」

彼の出てきた場所を見て、白龍は固まる。

それは蒼犬の執務室の奥部屋。

要は彼女が休むために使っている部屋だ。

そんな部屋から彼は、いつもよりずっと軽装で、揚句、身なりを整えながら現れた。

「よう、おはようさん。」

その言葉に紅鬼が反応し、左手を開いて黄猿に向けた。

黄猿はわけがわからず、右手を彼女に向ける。

そして紅鬼は軽く手を当てて挨拶をした。

その姿に黄猿も蒼犬も不思議な顔をした。

白龍が「挨拶だ」と軽く説明をしたのだが、

蒼犬はいかにも不信げな表情のままだった。

だが、それよりも、黄猿だ。

相変わらず、憎たらしい笑みを浮かべたままだ。

揚句「どうかしたか？」とまで、宣った。

白龍は奥することなく笑みを返し、

「いや、貴殿と蒼犬殿がそのような仲とは…。」

と返してやったのだが、白龍の顔の横を小刀が通り過ぎた。

「下種の物言いは気に入らぬ。汚らしい！」

違うのか！？という視線を黄猿に向けたが、

「さあ？」という返事しか無い。

本当に嫌なやつらだと心底思った。

「で、研石が欲しいんだろ？」

黄猿の言葉に紅鬼は激しく頷く。

「なら、部下の奴らに城下まで行かせてみるか。」

「いや、いらない。」

黄猿が部下を呼ぼうとした時、それを止めたのは白龍だった。

「それより紅鬼に外出許可をもらおう。」

蒼犬の顔が益々歪んでいく。

打って変わって、黄猿は面白そうな顔を見せた。

不思議そうな視線を向ける紅鬼に白龍は笑顔で言った。

「紅鬼、城下へ買い物に行こう。」

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4405z/>

鬼と龍

2011年12月19日12時52分発行